

ネパール、シエルパの民家で 仏画と出会う

小林 繁樹
こばやし しげき
民博文化資源研究センター

ネパールのエベレスト街道沿いにある、チベット仏教を信仰する人びとがくらす集落を訪ねたことがある。日本の田舎にいろのかと錯覚を起こすような居心地を感じ滞っていたところ、民家のりっぱな仏間に遭遇し、仏画師たちの仕事に目を奪われた。

極彩色の曼荼羅の世界

今から二〇年前の一九九三年の夏、ネパールのヒマラヤ山岳地帯を旅したことがあった。その行程の最中、ソル地方のジュンベシという集落でのことである。この地域はチベット系のシエルパの人びとがくらし、チベット仏教を信仰している。穏やかで物静かな人びととそれにふさわしい景観のたたずまいが気に入って、たった五日間だけではあったが逗留した。そして周囲を巡ったり、谷をあがった僧院を訪れたりして、内戦直前の緊迫した情勢など感じさせない、のどかな時を過ごしていた。

その日も、偶然、立ち寄った民家の二階の広々とした台所兼食堂で、バター茶をいただきながら雑談を交わしていた。そして、壁の一角を占める棚のなかのいくつもの大きな銅製の水入れや食器を眺めているうちに、向かいにある部屋の入口に気がついた。

家人に許しを得てのぞいてみると、部屋全体に広がる極彩色の曼荼羅の世界が目飛び込んできた。壁の一面には仏壇がしつらえてあって、やや小振りながら端整な仏像が安置されている。その左右には経文を置く棚もある。そして、三方の壁には仏画が隙間なく描かれている。正確にいえば、床から一メートル半弱ほどの高さから天井までの、これもおよそ一メートル半ほどの壁が、幾枚にも区切られた仏画でびっしり覆い尽くされているのである。その下は腰板が張ってあり、作りつけの長椅子が設けられている。肩や頭が当たる腰板の部分にも文様が施されている。そして天井には曼荼羅があり、梁や桁、柱の結合部にも絵や文様が描かれている。

じつにりっぱな仏間との遭遇であった。そしてその時、初めて、民家にもこうした仏間があることを知ったのだ。それまで、いくつかの民家で見えていた仏壇とは、まるで感覚が異なる。仏間という空間全体で、チベット仏教の宇宙観を表現しようとしているのだから。こうした空間構成は寺や僧院だけのものかと思ひこんでいたわたしには、新鮮で感動的であった。それから裕福な家には、それ相応の仏間をもっていることがわかってきた。

旅行記に書かれない民家のなか

ジュンベシは広く開けた盆地状の谷底に位置する集落で、標高は二七〇〇メートル、寺を中心にして、二、三階建ての民家が三〇戸ほど軒を連ねたり、点在したりしている。一六世紀ごろ、チベットからヤクを連れて移住してきたシエルパの人びとがもつとも古くから定着した村のひとつという。マツやシャクナゲの森林やイネ科の草地を切り開いて、オオムギ、コムギや、ジャガイモ、トウモロコシなどを栽培し、ヤクなどを飼育している。

ヒマラヤ山麓の自然や人びとのくらしは、オセアニアの島嶼部をフィールドにしてきたわたしにとって、やはり、随分、異なってみえた。けれど、思いのほか日本と似ており、滞在中は、日本の田舎にいろような錯覚さえ覚えるほどであった。また、ジリから入るエベレスト街道沿いにある集落だから、トレッカー対応の宿もある。だからか、それなりに旅行者や外国人に慣れているようで、構えることもなく過ごすことができる。

それでも、ジュンベシやこの周辺での旅行記に、民家の見事な仏間の記事が見受けられないのはなぜだろう。トレッカーは山行にいそしんで、民家を美しい風景のひとつとしてとらえてしまい、そこに住む人びとのくらしにまで関心をいさぐ余裕がないのだろうか。

別の日には、仏画師の家を訪ねることもできた。自宅の簡素な寝台に座り、仏画を描いている。諸仏には儀軌（規定）に則った図像があり、仏画師は師匠からいただいたり、自分で描いた粉本（手本）をもつていて、それを基に描くのだという。ある仏画師の家では、粉本を見せてもらい、幾枚かを譲ってもらいもした。チベット和紙に朱で幾何学的な計測線を引き、そこに諸仏を墨の実線で描いている。宝島の地図を発見したような思いで、これにも目を見張った。あの仏間の諸仏も、すべてがこうして描かれているのである。

計測線が入った図像の数々は、今ではネパールの短い旅と仏画師の方々との絆を示すわたしの大切な証であり、度量衡を考える際の契機となり続けている。



儀軌に則った描画法に基づいて仏画を描く



ジュンベシの中心地周辺。古い家並みも残っている



壁一面に仏画が描かれている民家の仏間



綴（と）じられた粉本帳。所々に修正が施されている



ヒマラヤ山麓のソル地方、ジュンベシの遠景

